



うちどく 推進講演会

1月31日、市民図書館で『うちどく推進講演会』がありました。

これは、市民図書館が、市民に絵本に親しみを持つてもらい、家読をさらに広めていこうと、毎年開催しているものです。

今回は、株式会社童心社の取締役編集長である橋口英二郎さんが『紙芝居と出会いなおす』と題して、講演と実演を行いました。



↑橋口さんが演じる紙芝居で観客に一体感が生まれていました

橋口さんは、紙芝居を実演しながら、演じ手が、観客に向き合い、語りかけるように演じることの大切さを伝えました。また、声の調子、絵のぬきさしのスピード、『問』の取り方で豊かなコミュニケーションを作ることなど、演じ手と観客、観客同士と一緒に作品を楽しむためのコツなどを話しました。

みんなよう
考えよう
人権・同和問題
No.281

このコーナーは、隔月のシリーズで掲載しています。これを手がかりに、家庭で人権・同和問題について話し合ってみましょう。

●問合先 生涯学習課人権・同和教育係 ☎23-3186

生命科学の進歩と人権

私たちが暮らすこの社会は、さまざまな人権問題があります。多くの人の努力によって解決に向かっていますが、一方で、近年の急激な技術革新や科学の進歩によって、新たな人権問題も生じています。

『ゲノム情報（遺伝情報）』に関する偏見や差別』は、そのひとつで、法務省は、啓発重点目標に掲げ、警鐘を鳴らしています。『ゲノム』とは、生物の細胞内にあるDNAと、そこに書き込まれた遺伝情報全体のことで、ヒトであれば23対の染色体に分けられ、細胞の核のなかにあります。

近年登場した『ゲノム編集』という技術で、生物の遺伝情報を作り替えることができるようになりましたが、2018年、中国の研究者が、この技術を使って「HIVに感染しないよう遺伝情報を作り替えた受精卵から、双子の

女兒を誕生させた」と発表し、世界に衝撃を与えました。

親は、生まれてくるわが子に「より賢く、より可愛く、より健やかに」などと、夢や希望を託します。ゲノム編集技術を使うことで、病気の予防だけでなく、希望する身体的特徴や能力をデザインすることなどができるのです。

しかし、人の受精卵にゲノム編集技術を利用することは、次世代における、予期せぬ病気などが心配されるほか、遺伝情報の操作の有無によって、社会的な格差が広がり、差別につながることも懸念されます。また「親が子どもの遺伝情報をデザインしてよいのか」という倫理上の問題からも、社会的な議論が行われ、日本でも法規制の整備が進められています。

生命科学の進歩が、いま、私たちに新たな人権問題を示しています。

郷土の文化財

●問合先 生涯学習課文化財係 ☎22-1262

伊万里の弥生時代の遺跡

前回は、伊万里市内にある弥生時代の遺跡数が少ないという話をしましたが、今回は、その数少ない弥生時代の遺跡について紹介します。

写真1は、西尾遺跡（二里町）から出土した甕棺です。甕棺は、福岡や佐賀市周辺などでは、よく見られる埋葬方法です。

大人を埋葬する方法としては、2つの甕を使って、それぞれの口を合わせ、内部に遺体をいれて埋葬するのが一般的ですが、伊万里では、1つの甕に遺体をいれ、口の部分

は、板石や木の板でふさいで埋葬しています。このことは、甕棺に使う甕が入手しにくかったことが要因だと考えられます。

写真2は、西尾遺跡から出土した箱式石棺です。板状の砂岩を組み合わせて作られていて、床は、薄い板石が敷かれています。この箱式石棺には、石棺の側石のまわりに、さらに板石を配置していて、このことは、伊万里における箱式石棺の特徴のひとつだと考えられます。



【写真1】



【写真2】